
興味範囲内奇特生物生存地区。

桜恋木の葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

興味範囲内奇特生物生存地区。

【Nコード】

N7018N

【作者名】

桜恋木の葉

【あらすじ】

「やっとみつけた・・・！」少女は見つけた。自分が存在する意義となるそこを。無気力お気楽少女と、少女に気に入られてしまったアンダーワールドの住人たちのシリアス？コメディー？まあ、物語です。

1・ウサギ穴ならぬ奈落穴

所詮人生というものなんてーのは、自分にとって利益があれば何とかやっていけるようなもんだ。

私もそんな風にのりくらりと生きてきた。

どれだけ媚を売られようが、恩を売られようが、どこ吹く風。

んで、無関心な私に両親は怒ったらしい。

感情が死んでるとまで言われちゃった。別に死んでるわけではないんだけどなあ。

たださあ、んー、興味がもてないっつーの？

ただそれだけなんだけどなあ。

あ、それがいかんのか？

んー、でも生まれてこの方なにかに興味を持ったことなんて皆無だしなあ。

自分の生死も興味外だし。

だから、親がいなくなった今となつてはこの人間に備わっている生存本能が邪魔で邪魔で仕方ない。

どうにかならないかなー

ならないよなー

ならないならならぬで、それなりに奇特な死に方してみたい。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ちなみにこれ全部、心の中の発言。

肉体は薄暗く小汚い路地裏に横たわつてゐる。

助かる見込みは、ないと思う。

だって、走馬灯なるものを体感してるんで。

わー目の前がピンクとブルーだよアハハアハハ。

ただ今精神異常中。注意。

・・・つか、アレ？こんな記憶あつたっけ？

しかも、なんか、体、おも・・・

そして私は意識を失った。

2・涙池ならぬ鉄錆池

コレでも中々、裕福な家庭に生まれたほうだと思う。

ただ、捨てられたら仕方ないじゃないか。

だから私はこうなったんだ。

「いっ、どっ」

本小説最初の発言がお決まりのパターンでした。

うん。なきたい。

ここどこ。路地裏ではない。絶対違う。

だってさ、

お花畑なんでもん。

私の頭がじゃないよ？目の前の光景がだよ？

目が覚めたらここで横に寝ていました。

なぜだ。いや花の匂いがいいから文句はないけど。

何？拉致ですのん？

何なのこの状況。

「あれ、お前、誰？」

「お前も誰だよ。」

あ、口滑った。

またしても何なのこの状況。

こいつは一体誰だ。

見た目は中々の好青年な感じがするけど・・・

服のセンスが微妙だ。

美的センスはないらしい。私が正常なのならば。

一言で表すと、んー、

何ちゃってアイドル。

え？ダメ？あんまりわらえない？ならば「もう俺を貶めるの止めてくれ。」

「あ、脳内に入ってこないで。」

「いや、その大きなお口からスピーカーのごとく内部情報垂れ流しだったから。お兄さん心臓をメッタ刺しにされたから。」

「あらま。まじですか。」

「まじです。」

ノリいいなーこの人。楽だ。

「ンで誰だよ」

「え、名前？名前すか？」

「当たり前じゃんか名乗れよ。ちなみに俺は智也」

「ちや？」

「おう。で、おまえは？」

「わたしはねー、ふふふ、」

剥奪されたから名前ありまっせーん！

ほおおそれはまた・・・ってえええええー！！！？

「え、マジに？じゃあなに、あんたも逃走者？」

「は？とうそっ？」

「その感じだと何も知らずにこっち着たんだな。」

「んー？まあなんもしらないねえ。」

「その様子だと俺以外に誰にもあつてないっぽいし・・・ハア、面倒なことになった。」

「んー、なんかごめーん」

「お前、ぜってえごめんって思ってたねえだろ。」

こうして、お花畑のど真ん中で漫才をした。

3・縮み薬？巨大化薬？

最初は自分というものを持っていた、と思う。

多分だからよく分らない。

物心がついて、その頃にはもう人生を諦めていたような気がするんだ。

「さて、これからどうすつかねえ？」

「とりあえずここについて教えてよ。」

「お前って遠慮も糞もねえな。」

「悪い？」

「いや、いいんじゃないの？なんとなくお前にあってる気がするし。」

そっぴやここに来て自分の意志で動くななんて久しぶりじゃないか？

マイペースを発揮するのも久しぶりだ。今までこいつ以外に自分に話しかけるのなんて奇特なことをする人間なんていなかったからなあ。

「とりあえず、ここはどこ？」

「ここは俗に言うアンダーワールド。正式名称とかはない。

だいたい何かに追われてたり世界から拒絶されたり・・・そういう風にもとの世界での自分の存在を消したい、否定したい奴が流れ着くんだ。」

意図して来る奴もいれば、お前みたいに迷い込んだりする奴もいる。まあお前は特例かな。役付みたいだし。」

「厄つき？なにそれ。」

「いやいや、字が違うから。」

この世界を形成するのに必要な役割だよ。世界を安定させるには最低でも4人いないといけない。」

「え、なんかめんどくさそう。」

「まあ、仕事があるわけではないから・・・（めんどくさいのはお前だ馬鹿）」

「そうなの？」

「嗚呼。存在することが重要でな。最初から役付ってのは珍しいが

な。」

「……アリス!!?」

第三者の声にはっとする。

「え……アリス?こいつが?」

「こいつって酷くない?あとアリスって何なの?」

「役の名前。中でも一番重要な役だ。」

「えーまためんどくさそうな……」

「チシャ猫!アリスから離れろ!」

「へ……」

「ヘーイ」

青年の声で智也は私から離れていった。

……ああ、なるほど、ここでは不思議の国のアリスの登場人物名が役の名前なのか。

じゃあこの人は……

「アリス、我等が5人目の役にしてジョーカー、待っていました。」

「白兔だよね？本名は？」

問うと青年はびっくりしたように目を丸くさせた。

「役の名前を当てるとは・・・失礼しました。私、白亜と申します。」

「はくあ、ね・・・んで何しに来たの？」

「お迎えに上がりました。どうぞ来てください。赤の城まで。」

ウン。だと思った。

こうして、アリスと命名を受け、城に向かった。

4 ・赤だらけの城内にて。

結局は人間なんて、誰かの、何らかの力添えなしに独りで生きようとしてもうまくいかないもんだと思った。

だってそうでしょう？

寝るところも、食べるものも、着る服だって。

誰かが作ったものを使ってるわけだ。

生産理由は需要と供給の関係なんだろうけど。

「アリス、つきましたよ？」

「赤の城、だっけ？」

「ええ。さあ、お手を」

差し出された手をとって城へ向かう。

つかでつかいなあ・・・

で〇にーらんどもびっくり。

そして超赤い。

何がつて、外装が。

中也赤かったりするのかなあ……

そんなことを思いながら前を歩いていく白亜に続く。

……内装も赤かった。

いや、絵の具じゃなくて血だったのがショッキング。

「ここまで真っ赤だとは」

「卒倒しなかったアリスは初めてですね。」

「そりゃどうも。今までのアリスって言う言い回しがきになるんだけど。」

つまりアリスは一人じゃないんでしょ？

そついうと、白亜は眉間にしわを寄せた。

「・・・勘よ過ぎない？僕のと看ときいい今といい・・・」

「いや、そんなんで機嫌悪くされても困るし。」

別に勘が言い訳ではないと思うんだけどなあ。

「あと、順応性高いよね。今だってリラックスしてるみたいだし。」

「人を不躰に観察しないでくれないかなあ？」

「ああ、ごめんごめん。」

ゴメンの気持ちがちみつとも感じられない。

まあいいか、とため息を吐いた。

「んで、アリスが複数って何」

「あ、覚えてた」

「あんなんで流されると思うてか」

「・・・また今度話すから、今は勘弁。それより、ほら。」

白亜に促されて前方を見ると、いつの間にか謁見の間に来ていたらしく、美しく血塗れる赤い玉座にこれまた美しく佇む赤いドレスを身にまとい、鎌を構えた美人さん。

あ、鎌を構えたって駄洒落になった。

「えーと」

その場に自分の声が響く。

え、ちょ、私今凄くいたたまれない。

隣の白亜に視線を送ってみるが、跪いているので私の視線に気付かない。

おいしいおいしい！気付いてよこの空気に！どうにかしてよおお
！！！！

「
・
・
・
・
アリス」

⌈
^
?
⌋

「アリスうっうっうっ！！！！！！」

「ええええええええええ!!?」

・・・えーただ今の状況。

美人さん、私の名前を呼ぶ。

私、空気が変わって拍子抜けした間抜けな声を発する。

美人さん、鎌をその手に持ったまま私の名前を呼びながら突進。

私、絶叫。

「ちょおおおお！！！！手、手元注意！近い！刃が近いですうおおー！」

「アリス！やっと来たのだな！待ちくたびれたのだぞ！」

見上げて嬉しそうに笑う女王様。

だけど私喜べないよ

鎌怖いよおおおおおおおおおお！！！！！！！！

久しぶりに生命の危険を感じた気がする。

こっちに来る前は日常茶飯事だったはずなのに体はすっかりそのことを忘れてしまったようだ。

「アリス！もちろん城に泊まるよな！」

「えええもちろんだから鎌あああ！！！！」

「こうして、私は衣食住を確保した。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7018n/>

興味範囲内奇特生物生存地区。

2010年10月9日07時05分発行